発達理論の学び舎

Back Number: Vol 215

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2019

目次

4281.【バルセロナ・リスボン旅行記】ダリ美劇場術館を訪れての感動
4282.【バルセロナ・リスボン旅行記】ダリが与えてくれた作曲上の方向性
4283.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在五日目の夜に
4284.【バルセロナ・リスボン旅行記】屑的・畜生的な人間で溢れるこの世界の中で
4285.【バルセロナ・リスボン旅行記】人間が救われる必要性と救われうる存在である可能性について
4286.【バルセロナ・リスボン旅行記】ふとした気づき
4287.【バルセロナ・リスボン旅行記】騒音と今朝方の夢
4288.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在六日目に見た夢の続き
4289.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在六日目の計画
4290.【バルセロナ・リスボン旅行記】ミロ美術館を訪れて
4291.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在の最後の夜に
4292.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ出発の朝に
4293.【バルセロナ・リスボン旅行記】空腹によるケトーシス状態を活用していたミロ
4294.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナを出発する朝に見た夢
4295.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ国際空港にて
4296.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ国際空港のラウンジにて
4297.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ上空で思うこと
4298.【バルセロナ・リスボン旅行記】陽気さと幸福さの滲み出すリスボンに到着して
4299.【バルセロナ・リスボン旅行記】素敵な街リスボン
4300.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在初日の夜に思う今後の旅行の仕方について

© YOHEI KATO 2019

4281.【バルセロナ・リスボン旅行記】ダリ美劇場術館を訪れての感動

今、ダリ劇場美術館を訪れ、フィゲラス・ヴァリファント駅の構内でこの日記を書いている。単刀直入に述べると、ダリ劇場美術館を訪れたことは、これまでのところ、今回の旅の最大のハイライトである。それぐらい、この美術館に足を運べたことを幸運に思う。

フィゲラス・ヴァリファント駅からダリ劇場美術館までは歩いて20分弱の距離なのだが、道中の景色があまりにものどかで驚いた。途中、家畜の独特の匂いが漂ってきたり、いつ頃建てられたのかわからないような土の家のようなものも幾つか見かけた。ここはダリの生地とのことであるが、ダリがこのような場所で生まれたことを驚く。

駅から美術館まではほとんど迷うことはなかった。ただし、予想以上にこの美術館を訪れる人がいて驚いた。チケットに関しては数分ほど待つだけで速やかに購入できたのだが、受け取ったチケットを見ると、時間が表示されており、私は11:30からの入場となった。それまでは40分ぐらい時間があり、美術館の外にあるギフトショップに行き、そこで一昨日にピカソ美術館で購入したのと同じシリーズ、そして昨日カサ・ビセンスで購入したのと同じシリーズのダリに関する資料を購入した。それと、ダリに関するドキュメンタリーDVDも購入した。

私は美術館の前の木陰に座り、購入した資料を早速眺めながら入場までの時間を過ごした。購入した資料は、ピカソやガウディのものと同じぐらい、いや私にとってはそれ以上だったかもしれないほどに興味深く、資料を読んでいると、あっという間に入場の時間となった。帰りの列車は三時前にフィゲラス・ヴァリファント駅を出発するものであり、ダリ劇場美術館では三時間ほど時間を過ごすことができるため、十分かと思った。

案内マップに沿って鑑賞を始めてみると、ダリの世界にすっかり虜になり、一つ一つの絵画やオブジェなどに釘付けになった。正直なところ、フィゲラスという町は本当に田舎であり、美術館のある周りだけにほんの少しだけレストランや売店があるぐらいだ。そんな場所にもかかわらず、多くの観光客がこの町に足を運び、ダリ劇場美術館にやってくるのもうなづけるぐらいに、この美術館の作りと所蔵作品はすばらしかった。

ダリもピカソと同じように、古典主義的な絵画技法の習得から始め、ピカソがベラスケスなどから多大な影響を受けたように、ダリもベラスケス、エル・グレコ、ラファエロなどの画家、そしてピカソとも親交があったためにピカソからも影響を受けていたと言える。また、私がダリに感銘を受けるのは、様々な絵画技法を習得し、生涯を通じてその技術を絶えず変容させていった点だけではなく、その過程において、物理学や神秘主義思想、さらには精神分析学などを学んでいた点にある。そうした絶え間ない学習と研鑽がダリの超越的な絵画思想と絵画技術に顕現している。

今回のバルセロナ滞在期間中に訪れたピカソ美術館でも幾つかの作品に思わず足を止めて、そこで黙想的な意識の中で作品を眺めていることがあった。その時以上に、今日訪れたダリ劇場美術館ではさらに多くの作品に足を止めて、黙想的な意識、さらにはダリが作品中に陥っていたであろう超越的な意識にあった。

すでに幼少時代の私に何かあると思わせたダリの絵画世界には、今の私も以前として強い関心があり、今回ダリ劇場美術館を訪問することによって、さらにダリの作品と彼の思想に関心を持った。今日はホテルに戻ったら、先ほど購入した文献資料の続きを読もうと思う。フィゲラス:2019/4/30(火)14:55

4282.【バルセロナ・リスボン旅行記】ダリが与えてくれた作曲上の方向性

たった今、フィゲラス・ヴァリファント駅を列車が出発した。今朝、バルセロナ・サンツ駅を出発した列車はパリ行きだったのに対して、今乗車した列車はマドリード行きのようだ。今回も、途中駅のバルセロナ・サンツ駅で下車する。今から一時間ほど列車の旅を楽しみたい。

バルセロナ郊外は、予想通りに長閑な風景が広がっていた。バルセロナ滞在中は天気に恵まれ続けており、今日も快晴であり、それでいて汗をかかない清々しい一日である。今日は昨日ほど歩いていないが、フィゲラス・ヴァリファント駅からダリ劇場美術館までは往復で40分ほどあり、いい散歩になった。足を休ませるために、今靴を脱いでくつろいでいる。

バルセロナ・サンツ駅に到着したら、昨日訪れたオーガニックカフェに行き、夕食分の大きなサラダを今日も二つ購入する。今朝ホテルを出発する時に、水を1L分持ってきたのだが、すでにほぼ飲

んでいる状態なので、カフェに到着したら、サラダに合わせてスムージーを購入し、店内でスムージーを飲んで少しくつろぎたい。

バルセロナ・サンツの駅に到着するのが15:50であり、そこからカフェまでは歩いて20分ほどの距離であり、閉店が17:00なので長居はできないが、スムージーを飲みながらダリに関する文献資料の続きでも読もうかと思う。

それにしても今日は、ダリ劇場美術館に訪れることができて本当に良かった。今回の旅の最大のハイライトのひとつになるだろう。私は単にダリの絵画作品や思想を好み、それに共感しているだけではなく、ダリの世界観と似たようなものを是非とも自分の作曲実践の中で表現したいという思いがある。その思いはとても強く、美術館内で作品を見ながら、目の前にある絵をどのように曲として表現できるだろうかと絶えず考え続けていた。

そのような観点でダリの作品を食い入るように見ている人はほとんどいないようであり、たいていの人はちらりと作品を見て、すぐに次の作品に移って行っていた。ダリのシュルレアリスム的な作品だけではなく、私は、ダリが岩の絵を組み合わせて様々なテーマの絵を描いているシリーズに大変関心を持った。

今日はホテルに戻ったら、早速ダリの絵から喚起された感覚を曲にしてみようと思う。また今後は、シュルレアリスム的な曲を是非とも作ってみたい。そのためには、今のところ、12音技法を活用するぐらいしか方法が思いつかないが、その他の方法としては、スクリャービンが考案した神秘和音を積極的に活用することや、神秘的・幻想的な響きを持つ音列を活用することが考えられる。

それらの探究を本格的に行うために、フローニンゲンに帰ったら、参考になる文献を何冊か購入してみようと思う。神秘的・幻想的な音の響きを追い求めた作曲家として思いつくのはスクリャービンであり、この夏はやはりモスクワに行き、スクリャービン博物館に足を運ぼうと思う。また、少し前に購入しようと思っていたスクリャービンに関する数冊の書籍もフローニンゲンに帰ったら早速注文しようと思う。あるいは、この旅の最中に、神秘的・幻想的な響きを持つ音ないしは音列の探究に有益な書籍を調べ、購入手続きを進めてもいいかもしれない。

© YOHEI KATO 2019

とにかく今日ダリ劇場美術館に訪れることができたことは、自分の作曲実践上の大きなターニングポイントになるだろう。作曲に関してまた新しい方向性が見えてきたことを本当に嬉しく思う。バルセロナ・サンツ駅に到着するまであと40分ほどあるため、今の気持ちのまま、これから作曲上の写経実践を行う。バルセロナ・サンツ駅に向かう列車の中：2019/4/30（火）15:12

4283.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在五日目の夜に

時刻は午後八時を迎えようとしている。今朝は何時に起床したのか忘れてしまい、今確認してみると、今朝はどうやら三時半過ぎに起床したようだ。

今日は仮眠を取らずにこの時間まで冴えた状態でいる。それは一日一食生活と良質な食事によるおかげであり、その他には、今日のダリ劇場美術館でのダリとの深い出会いがあったからかもしれない。そうした諸々の要因が複合的に作用して、三時半の起床から今の時間まで非常に活動的である。繰り返しになるが、今日はフィゲラスのダリ劇場美術館に足を運ぶことができて本当に良かったと思う。この旅を語る上で、今日訪れた美術館で得られたことは最重要なものの一つに挙げることができるだろう。

今日はダリからの刺激を受けて、一曲ほど曲を作ってから就寝したいと思う。その際には、神秘和音を活用し、特にその構成音を様々な形で使ってみようと思う。またその際には、神秘和音の考案者であるスクリャービンの曲に範を求めることをあえてせず、新ウィーン楽派の前衛的な作曲家アントン・ウェバーンのいずれかの曲に範を求めようと思う。そして何より、ダリのいずれかの絵画作品から得られる感覚をもとに曲を作りたいため、本日購入した画集を眺め、そこから何かしらのインスピレーションを得たい。

これから少しずつ自分の作曲の幅を広げるようにしていきたい。昨日も考えていたのだが、学んだ作曲理論の何かしらの観点を実際の曲を作る時に活用したら、それをどのように活用したかをその都度文章化しておきたい。これまでもそれを時折やっていたのだが、今後はよりそれを意識したいと思う。この点についてもまた新しい習慣にしたいと思う。すでに夢日記を書くことや、日中に仮眠を取った際にビジョンを見ていたのであれば、それを書き留めておくことも習慣になっているのであるから、作曲実践上においてそうした文章を書き留めておくことも習慣にできるだろう。

兎にも角にも意図的かつ実験的な実践を繰り返し行っていき、どのような仮説を持って作曲をしたのか、曲を作るという実験を通じてどのような結果が得られ、また次にどのような仮説を検証してみたいと思っているのかをメモ書き程度でいいので書き留めておく。こうした文章化の実践を習慣としたい。その他にも、作曲の学習に関しては、以前言及したように、他の領域の人たち、とりわけプログラマーや、将棋や囲碁の棋士たちがどのような学習及び研鑽を積んでいるのかを参考にしていく。

今日は、フィゲラスの町ではほどよく歩き、バルセロナ市内に戻ってきてからは、オーガニックカフェのBONに行くまでの道をほどよく歩いた。合計で一時間半ぐらいのウォーキングになったであろうか。そうしたこともあり、今日もBONで購入した夕食のサラダが本当に美味しく感じられた。ここで売られているサラダは、ボリューム満点であり、それでいて良心的な値段である。

今日もサラダを二人前分食べた。明日は実質上バルセロナ滞在の最終日となるが、明日の夕食もここで購入したサラダにしようと思う。リスボンで宿泊する予定のホテルの近くにもオーガニックレストランがあり、市内には何軒かオーガニックレストランがあるため、リスボンでも良質なものを食べることができるだろう。本当に日々何を内側に取り入れるのかについては、食のみならず、情報や知識、さらには体験についてもより意識を向けて行こうと思う。バルセロナ：2019/4/30（火）20:13

4284.【バルセロナ・リスボン旅行記】屑的・畜生的な人間で溢れるこの世界の中で

今朝も午前三時半過ぎに起床し、シャワーを浴び、今は午前四時を迎えようとしている。

今朝は一度午前二時あたりに目覚めた。その時、現代社会、いや人類の歴史が始まって以降に人間に共通する性質に対して新たな共感の念を持った。それは人間は太古から現在にかけて、屑であり、どこまでも畜生、ないしは畜生以下であるということへの理解から生まれた共感であった。もう少し厳密に言えば、人類史において、なぜある人間たちが別の人間たちを屑や畜生のように扱おうとするのかという点についての理解、さらには、別の人間たちを屑や畜生のようにみなす屑かつ畜生的な人間の心の内側が突然に理解できたような感覚があったのである。

実は昨日もバルセロナの街中を歩いている最中に、現代社会がこうも屑や畜生のような人間を大量生産するのはおかしいと思っていた。そして、そうした屑や畜生のような人間を生み出そうとする屑や畜生のような人間がこの社会にいるという当たり前のことにはたと気づかされたのである。

確かに私は幾分厭人的な性質を持っているが、人間の真の良さや人間として生きることの少なからぬ喜びを見出しながら毎日を生きているつもりである。だがそうは言え、この世界の有り様は無残であり、屑と畜生のような人間たちばかりで溢れる世界に生きることに対しては幾分厭世的にならざるをえない時がある。昨日バルセロナの街中を歩いていた時にそのような気分に陥った。また、そうした感覚が就寝中の自分の中で再度湧き上がり、深夜未明にも同種の思いと考えが芽生えて一度目を覚ました。

以前日本に一時帰国した際に、ある知人の方から仏陀の考え方で興味深いものを聞いた。それは、上座部仏教と大乗仏教の違いに関する話から派生したものであった。厳密には仏陀の考え方というよりも、それは知人の解釈なのだが、一つ興味深い考え方があり、それは上記の点と関係しているように思う。その方曰く、仏陀が生きていた時代に定められた戒律に則った教えを守ることに主眼を置き、衆生ではなく、行を積んだ一部の人間しか人間の苦しみから救われないとする上座部仏教の教えを見ると、仏陀も人間というのは所詮屑であり畜生のような存在とみなしていた可能性が高く、全ての人間を救うことなど不可能であることを見抜いていたのではないか、というものだった。

この指摘は大変興味深く、上座部仏教の教えのように、利他の行いによって全ての衆生を救おうとするというのは表面的には大変素晴らしいものだが、現実のこの世界の有り様を冷静に眺めてみると、その実現は甚だ不可能であることがわかる。

今の私は、もし仏陀が本当に全ての人間を救えると考えていたのであれば、つまり大乗仏教の教えにあるような考え方を持っていたのであれば、それには反対である。一方で、仏陀がこの世界に生きる人間は本質的に屑や畜生であり、屑や畜生が新たな屑や畜生を生み出し続ける仕組みが存在していることを見抜き、全ての人間を救うことなどできはしないと見抜いていたのであれば、仏陀のそうした考え方に賛成である。

© YOHEI KATO 2019

屑と畜生の螺旋というのも無限に続き、屑や畜生を生み出す、屑的・畜生的な人間の存在を理解する屑的・畜生的な人間がさらに存在し、その階梯はまだまだ続いていく。人間はどこまでいっても屑であり、どこまでいっても畜生の域を出ないのだろう。正直なところ、屑や畜生の方が人間よりも尊い存在であるとさえ思えてきてしまう。そうした厭人的な考え方が、昨日、そして先ほどの早朝未明に芽生えたところでバルセロナ滞在六日目が始まった。今日もまた、一人の屑な人間、畜生のような人間として、屑と畜生のような人間の溢れるこの世界の中で生きていく。バルセロナ:2019/5/1(水)04:19

No.1903: In the Evening on the Last Day in Barcelona

The last day to stay in Barcelona is now approaching the end. I want to digest what I experienced in this city. I'll leave Barcelona tomorrow for Lisbon. Barcelona, 18:41, Wednesday, 5/1/2019

4285.【バルセロナ・リスボン旅行記】人間が救われる必要性と救われうる存在である可能性について

今、ホテルの自室のバルコニーにつながるドアを開け、換気を始めた。早朝の四時半を迎えようとしている今の気温は肌寒く、辺りはまだ闇に包まれている。

先ほど、この世界に溢れる屑や畜生のような人間について、あるいは、そもそも人間というのは本質的に屑や畜生のような存在であるということについて書き留めていたように思う。

発達理論というのは、その適用において、大乗仏教的な考え方に則って理解・活用される場合と、上座部仏教的な考え方に則って理解・活用される場合に分かれる。基本的にそれらのどちらかの考え方が採用され、それらの考え方を折衷したり、止揚したりするものはほとんどないように見られる。どちらの考え方もある側面においては正しく、ある側面においては正しくないという難問がつきまとっていることが容易にわかる。おそらく世間一般に聞こえがいいのは、大乗仏教的な考え方を採用した場合であろう。

そうした考え方に基づいて発達理論を理解し、適用しようとする人たちは、仮に上座部仏教的な考え方を採用してしまった場合に、一部の人しか救われないというその一部の人間に自分が入れな

いかもしれないという隠れた恐れを抱いている傾向があり、それを心の闇として持っている傾向にあるように思う。一方、上座部仏教的な考え方を発達理論に適用してしまうと、優生学的な発想や選民思想的な発想に陥りやすいという危険性がある。どちらも本当に頭を悩ます問題である。

昨日バルセロナの街を歩いていた時に感じていたこと、そして今朝方未明に考えていたことをもとにするならば、確かに以前の私は大乗仏教的な考え方に基づいて発達理論を理解しようとし、それを適用しようとしていたが、現在はどちらかというと上座部仏教的な考え方に寄っているように思う。

しかしここでそもそも、上記のような問題がどちらの考え方にもあるのであるから、何か別の発想が必要なのではないかと思ったのである。どちらの考え方も共に、全ての人間なのか一部の人間なのかという区別があるものの、人間が救われることを目指している点では共通している。

そこで私の中でふと、そもそも人間というのは救われる必要があるのか、そして人間とはそもそも救われうる存在なのかという問いが芽生えたのである。この問いが芽生えた時、ひょっとすると、人間というのはそもそも救われる必要もなく、最初から救われえない存在なのではないかという考えを持ったのである。

確かに、発達理論の根幹に規範的な側面を据えて、それを単なる科学的な枠組みではなく、単なる形而上学的な枠組みでもなく、この現代社会に何らかの関与をしていくための規範的枠組みを示し得る実践的な理論体系として機能する必要性は感じているが、出発点として、そもそも人間というのは果たして救われる必要があるのか、そして人間は救われうる存在なのかについても考えていかなければならないと思ったのである。

バルセロナ滞在の六日目の朝は、随分と悲観的かつ厭人的な考え方が色濃く自分の内側に芽生えているように思うが、この世界に生きる誰一人として私は救われえないという考えを今この瞬間に持ってしまっている。「持ってしまっている」という表現の中に、そうであってほしくないという希望のようなものが見える点に、まだ人間の可能性を信じているのか、はたまた人間の可能性を過信しているのかもしれない。人間が畜生であれば、それは救われる必要性と救われうる存在であるという可能性はあるかもしれない。だが仮に人間がそもそも屑であれば、救われる必要性も救われうる存在であるという可能性も全くないように思えるのは私だけだろうか。

© YOHEI KATO 2019

早朝の四時半を迎えたバルセロナ・サンツ駅の通りには、徐々に人の姿が見える。そして、駅近くの通りの交通量も少しずつ増えてきた。

今私の目に映る人々は、救われる必要性と救われうる存在である可能性を内包しているのだろうか。そして彼らを見ている自分自身にも、救われる必要性と救われうる存在である可能性が内包されているのだろうか。仮に畜生であればYesかもしれないし、屑であればもはやNoなのかもしれない。バルセロナ:2019/5/1(水)04:39

No.1904: In the Morning to Leave Barcelona

Finally, the day to leave Barcelona came. I'll arrive at the Barcelona-El Prat Josep Tarradellas Airport around 9AM and have a relaxing time in a lounge, composing music. Barcelona, 05:42, Thursday, 5/2/2019

4286.【バルセロナ・リスボン旅行記】ふとした気づき

一昨日の夜、バルセロナ滞在の四日目にして初めて、ホテルの自室に冷蔵庫が備え付けられていることに気づいた。冷蔵庫の中には、サービスのミネラルウォーターが二本備え付けられており、大変感謝をした。

これまでリンゴを机の上に常温保存し、カカオ100%のチョコレートも同じように保存していたのだが、やはりそれらは冷蔵庫に保管していた方が良く、机の下の冷蔵庫の存在に遅れはしたが気づいてよかったと思う。最初それは金庫のようなものだと認識していたのだが、金庫はクローゼットの中にもあり、二つあるのはおかしいなと思って、実際に机の下の物体の扉を開けてみたところ冷蔵庫だった。紛らわしいのはその色と外側につけられた鍵だった。

鍵をかけられる冷蔵庫など見たことがなかったため、今回のようなことが起きたのだと思う。ただし、なんでもそうであるが、何かに気づくことは大切であり、確かにそれが手遅れになることもあるが、今回は四日目に気づいたとはいえ手遅れではなく、それ以降の滞在においてこの冷蔵庫は十分に活躍してくれている。今もリンゴとカカオチョコレートを冷やしているし、夕食のサラダを購入して自室に持ち帰った時にはこの冷蔵庫に保存させてもらっている。

昨日、一日の観光をすべて終え、夕食前に浴槽にゆっくりと浸かっていると、あることに気づいた。普段フローニンゲンで生活している時にも浴槽に毎日浸かっているのだが、この二ヶ月間ほどはココナッツオイルを浴槽に垂らして湯船に浸かるということを行っていた。こうした風呂の入り方に伴って、化学物質が含まれているシャンプー、洗顔、ボディソープなどを一切使わなくなった。この効果については自分でも驚いている。

というのも、確かに私は最初から抜け毛も白髪も少なかったのだが、抜け毛はさらに減り、白髪も減少してきたのである。どちらもココナッツオイル風呂による効果だけではなく、食生活の抜本的な見直しの方が大きな影響を与えているかもしれないが、一つ言えるのは、シャンプー、洗顔、ボディソープなどを使わなくても、体の汚れは十分に落ちるということであり、逆にそれらの化学物質まみれの商品なるものを使ってしまうことによって、皮脂が落ちすぎてしまい、外側の刺激に対して皮膚が弱くなってしまうのではないかと思う。

昨夜の気づきはその点にあったわけではなく、ひょっとすると、今後はココナッツオイルを湯船に垂らす必要もないのではないかと思ったのである。お湯だけで十分に身体の汚れが落ちることを、今回のバルセロナ滞在期間中に実感している。備え付けのシャンプーやボディソープを一切使っていないのだが、身体の汚れは十分すぎるほどに落ちている。フローニンゲンに戻ってからは、ココナッツオイルを湯船に垂らすことを控えたいと思う。これによって、湯船をオイルで汚さないことにもつながるであろうから、掃除もさらに楽になるだろう。そのようなことを考えていたことをふと思い出す。
バルセロナ：2019/5/1（水）04:57

No.1905: A Cold and Soft Rock Surface

I'll start to pack my staff shortly for check-out. Barcelona, 06:29, Thursday, 5/2/2019

4287.【バルセロナ・リスボン旅行記】騒音と今朝方の夢

今朝方の深夜12時に、ホテルの廊下で誰かが大きな声で歌を歌い始めたために目を覚ましてしまった。今回宿泊しているホテルはそれなりのホテルなのだが、こうした他人に迷惑をかける客がいることが残念でならない。また、この六日間の滞在中、昨日を除いて、夜から深夜にかけて、下の階か、それまた下の階の滞在者が大きなロック系の音楽をかけているような騒音がかすかに聞こえて来る。

私は生まれた時から音に敏感であり、そのかすかに聞こえる騒音、特にその不快なビートが大変心地悪い。

今朝も深夜三時半に目覚める直前までそのビートの振動が私の部屋まで伝わっていた。深夜2時に目が覚めたのも、実はそのかすかな音と振動が原因によるものだったのではないかと思う。周りの人たちがそれに気づいていないはずはないだろうし、不快に思っていないはずはないと思うのだが、なぜ苦情を申し出ないのか不思議である。私であれば真っ先にロビーに申し出で、即そうした迷惑行為をやめるように注意してもらうのだが。仮に今の自分の部屋から、その騒音がどの部屋から特定できれば、ロビーに伝えるのだが、それが特定できないのは残念だ。

欧米での生活も八年目を迎えようとしており、ここ最近思うのは、私は随分と言葉で自らの意思をはっきり相手に伝えるようになったということだ。こうした苦情に関しても、以前であれば言語的コミュニケーションの面倒臭さ、そして日本人特有の社会性と、言わなくても伝わるだろうという以心伝心的なコミュニケーションスタイルがあったため、言葉を使って意思表示をそれほどしない傾向があったが、今はとにかく思ったことや感じていることを速やかに言葉にするようになっている。これは良かれ悪しかれそうである。

上記の一件に関係した夢を今朝方見ていたことを思い出した。夢の中で私は、小中学校時代を過ごした社宅の中にいた。ちょうどリビングには、父と母がいて、普段通りに和気藹々とした会話を楽しんでいた。すると突然、私は「しっ！静かに」と人差し指を顔の前に立てて二人に述べた。それに続けて、「ほらっ、聞こえるでしょ？」と私は述べた。すると父が、「ん？何も聞こえないよ」と述べ、それに対して私は、「上の階からロック系のビート音が聞こえてきてるでしょ」と述べた。そこで両親と私はさらに息を潜めて静かにしていると、三人とも上の階から響いてくる騒音に気づくことができた。そこで父が、「これはちょっと迷惑だな」と述べた。

少し前までは、私たちが住む部屋の上には、前職時代のアメリカ人の同僚が住んでいて、彼は先日引越しをしてしまった。彼が住んでいる時はとても静かであり、このような騒音が聞こえてくることは一切なかった。そんな彼が引越しをし、アメリカに戻ってしまった後に新しく引越しをしてきたのは、日本人の家族だった。その家族は、一見すると全員おとなしそうだった。二人のお子さんがいて、

一人は中学生の女の子、もう一人は小学校高学年の男の子だった。二人の子供の年齢を考えると、両親は40代の前半か半ばであった。

その二人の両親は穏やかそうで、決してロックなどを聞くような人間には見えないのだが、確かに上の階から騒音が聞こえてくる。そこで私は、「上の階の人にうまく伝えてくるよ」と父と母に述べ、そこで夢から目覚めた。目覚めると、現実世界のホテルのベッドの上でうつ伏せになって寝ている私の耳に、下の階のどこからか聞こえてくる騒音と振動が小さく聞こえてきた。この騒音の出処も屑か畜生のような人間の所にあるのだと私は思った。バルセロナ：2019/5/1（水）05:24

No.1906: Relaxation at the Sala VIP Pau Casals Lounge

I'm relaxing at the Sala VIP Pau Casals Lounge in the Barcelona international airport. The boarding time will come within an hour. I look forward to visiting Lisbon very much. Barcelona international airport, 10:59, Thursday, 5/2/2019

4288.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在六日目に見た夢の続き

時刻は午前六時を迎えた。今朝方の夢について先ほども振り返っていたが、もう少しその続きを振り返って起きたい。夢の中で私は、海底に潜っていくタコを観察していた。すると不思議なことに、途中から私は観察対象のタコそのものになった。タコそのものになってみて初めてタコの気持ちがわかり、タコがどのような気持ちで海底に潜っていくのかが理解された。

タコになった私は、最初一匹のカニを捕まえて食べた。すると今度は、さらにゆらゆらと海底に潜って行き、他にカニがいないかを探し始めたのである。海底にたどり着いたと思ったら、その瞬間に私の意識は再びタコを観察する人間に戻った。タコが海底に到着すると、そこは実際には海底ではなく、広大な海底迷宮のような場所だった。

海底迷宮の中には海水が浸っておらず、そこには空気があった。するとまたしても、私はタコの中に意識が入って行こうとしているのを感じたが、タコの中に意識が完全に入る代わりに、海底迷宮に人間としての私がいた。そこはどこか、山口県の秋吉台の鍾乳洞を思わせるような場所だった。中はひんやりとしていて、他の生命の気配が最初全くなかった。しかし、よくよくその場所を歩き回って

みると、人々が生活をしていることに気づいたのである。私はそこで生活をしている人々の中から悪人を見つけ、彼らを成敗する役割を担っていることに気づいた。

ここでいう悪人というのは、そこで暮している人々を抑圧する存在であり、ここで暮している人々の格好は縄文時代か弥生時代の人々のような衣服を着ているのだが、彼らを抑圧する人々はスターウォーズで出てきそうな宇宙服を着ていた。そうしたことから、誰が悪人かは一目瞭然であり、私は善人に対しては、自分の手のひらから発せられる治癒と変容のエネルギーを送り、悪人に対して、相手を吹き飛ばすことのできる攻撃的なエネルギーを手のひらから発していた。

鍾乳洞のような場所をしばらく歩いていると、突然視界が開け、そこには現代的な街が広がっていた。ただし、そこには人がほとんどおらず、「人間が消えた街」と形容できるような殺伐とした雰囲気が漂っていた。すると、そこで私は自分が夢を見ていることに気づいたのである。そこからは少し明晰夢の意識のような形で夢を見ていた。その街に小中学校時代の友人が数人現れ、そのうちの二人は親友（HS & AF）であった。そのうち、私は一人の親友に肩車をしてもらうことになり、街の向こう側がどのようになっているのかを眺めた。景色は今いる場所とほとんど変わらず、遠くの方も殺風景であった。

私たちは、近くにあった映画館のよう場所に行き、そこでは何も上映されていないにもかかわらず、スクリーンのある部屋に行くために、チケット売り場でチケットを購入するための列に並んだ。ここでも不思議なのは、チケット売り場には誰も係員がいないのにチケット売り場に行ったこと、列など誰も作っていないのに、あたかもそこに見えない人間たちが並んでいるかのように見なしながら列を待っていたことである。

そんな奇妙な行動を私たちが取っていると、私に話しかける人がいた。振り向くと、ジョン・エフ・ケネディ大学時代に知り合ったプエルトリコ人の友人のダニエルだった。ダニエルは突然私に神妙な顔で、「ヨウヘイの研究を手伝いたい」と述べた。私はダニエルと仲が良く、彼に研究を手伝ってもらえるのは嬉しかったが、彼が私に話しかけてきた時の神妙な顔が気になった。

とはいえ、それは気のせいだろうと思い、私はダニエルの申し出を有り難く受けた。そして一旦ダニエルと別れ、誰も待っていない列をゆっくりと先に進み、いよいよチケットカウンターにたどり着いた

と思った時に、再びダニエルが後ろから私に話しかけてきて、「ヨウヘイ、すまない。研究を手伝う際にかかった費用はどれくらい申請できる？」と私に尋ねてきた。そこで私は、「かかった分だけ全て申請できるから何も心配しなくていいよ」と述べた。そこで夢から覚め、研究費用の項目のうち、何かの作業は一人の被験者につき2ドルだったのを覚えている。バルセロナ：2019/5/1（水）06:25

No.1907: The First Impression of Lisbon

I came to Lisbon from Barcelona in the afternoon. I have been already fascinated by the attractiveness of Lisbon. Lisbon, 21:05, Thursday, 5/2/2019

4289.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在六日目の計画

時刻は午前六時半を迎え、バルセロナの街も少しずつ明るくなってきた。バルセロナの今日の最高気温は19度であり、最低気温は12度とのことであり、春秋用のジャケットを羽織って丁度良いような気温である。バルセロナ滞在中には幸いにも天気に恵まれ、一度も折り畳み傘を使う必要がなかった。今日もそれを使う必要がなさそうであり、明日から訪れるポルトガルのリスボンにいたってはジャケットさえ不要な暖かい日が滞在期間中ずっと続くようだ。

サッカーの街バルセロナに滞在しているということもあり、また私がサッカーの盛んな欧州で生活をしているということもあり、現在も毎年欧州チャンピオンズリーグについては気にかけている。高校時代のように、全ての試合を見ているわけではなく、現在はもう決勝戦ぐらいしか見ていないのだが、今大会においては、オランダの名門チームアヤックスが準決勝まで勝ち残っているという快挙を成し遂げ、昨日の準決勝ではイングランドの名門トットナムを相手にアウェーで勝利したというニュースを先ほど知った。

オランダに住んでいるためか、アヤックスには是非とも決勝まで勝ち残ってもらいたいと思う。そして今日行われるバルセロナ対リヴァプールの勝者に勝利して、歴史的な優勝を獲得してもらえればと思う。アヤックスは確かに名門だが、近年のチャンピオンズリーグにおいてオランダのチームがここまで躍進することはなかったために、驚きがあり、同時にこの躍進を準決勝の2試合目と決勝でも続けて欲しいと願う自分がいる。

いよいよ今日が実質上バルセロナ滞在の最終日となる。最終日の今日は、これからまず早朝の作曲実践を行う。早朝に少なくとも二曲ほど作り、時間を見て、ウィルバーの監訳書の注釈のレビューに取り掛かる。注釈のレビューについてもすでに作業量と作業時間についての見積もりが頭の中にあり、今日中にそれを終えることができるだろう。

結局私は、編集者の方が指定したレビュー期限の一週間前に再校のレビューを終えることができそうだ。レビューを進め、九時半を回ってから、まずはホテルの近くにある楽譜屋に立ち寄る。バルセロナ市内には楽譜屋はそこしかなく、昨日の段階では、今回の旅においてわざわざ楽譜屋に立ち寄る必要があるかのかと疑問に思ったが、せっかくなので足を運んでみたいと思う。この「せっかくなので」という言葉によって導かれるアクションが、往々にして意外な出会いをもたらすことは、数日前のガウディの建築物を見学した際にも感じたことである。楽譜屋で何か良い楽譜が見つかれば、それを購入したい。できればスペイン出身の作曲家の楽譜を購入したい。

楽譜屋を訪れた後に向かうのは、ミロ美術館である。ミロ美術館は、滞在二日目に訪れたカタルーニャ美術館の近くにあり、行き道についてはもう頭の中にある。今回のバルセロナ滞在通じて、カタルーニャ地方出身の三人の偉大な芸術家、アントニ・ガウディ(1852-1926)、ジョアン・ミロ(1893-1983)、サルバドール・ダリ(1904-1989)と接近できたことは嬉しいことであった。

ミロの作品もゆっくりと堪能し、ギフトショップではミロに関する文献資料を購入したいと思う。ミロ美術館を訪れた後に、一旦ホテルの自室に戻り、荷物を置いて少し休憩をする。おそらく昼過ぎか午後二時までにはホテルに戻れるだろう。そこで時間を見て仮眠を取り、仮眠後はここ連日お世話になっているオーガニックカフェのBONに散歩がてら歩いて行き、そこで夕食のサラダを今日も二つ購入する。ホテルに戻ってきてからは、監訳書のレビューの続きを行い、それが終わり次第作曲実践をするか、今日購入する予定のミロに関する画集を眺めたいと思う。バルセロナ滞在の最終日もきっと充実した一日になるだろう。バルセロナ:2019/5/1(水)06:55

No.1908: A Gift from the Early Morning in Lisbon

The second day to stay in Lisbon began. I've already had a feeling that I received a precious gift from the early morning in Lisbon. Lisbon, 03:38, Friday, 5/3/2019

4290.【バルセロナ・リスボン旅行記】ミロ美術館を訪れて

つい先ほどミロ美術館からホテルの自室に戻ってきた。昨日のダリ劇場美術館に匹敵するぐらいの促しをミロの作品から受けた。

今日は予定通りに、午前九時半にホテルを出発し、まずはバルセロナ市内の楽譜屋に足を運ぼうとした。携帯の地図を確認しながら歩いて行き、楽譜屋があるはずの場所に辿り着いてみると、そこに楽譜屋はなかった。もしかすると、この楽譜屋はもう経営をしていないのかもしれない。楽譜屋がそこにないこともまた何かの縁であり、運命なのだろう。そのように思いながら気を取り直し、楽譜屋からミロ美術館に向かった。今朝のバルセロナは爽やかであり、早朝の太陽の優しい光とそよ風がとても心地良かった。

20分ぐらい歩くと、ミロが若手の芸術家のために建てたと言われる美術館が見えてきた。小高い丘の上にあるこの美術館の周りは緑に満ち溢れており、美術館の周辺は春のこの時期において大変清々しい。生命力に溢れる緑を眺めながら、受付に行き、チケットを購入しようとしたところ、私にはチケットを購入せずとも先日カタルーニャ美術館で購入した美術館パスポートがあることをふと思い出した。危うくチケットを購入し直すところだったが、直前でパスポートの存在に気づくことができてよかった。

オーディオガイドの分だけ別料金を払い、オーディオガイドのヘッドホンを当てながら、一つ一つの作品を見て回り始めた。このオーディオガイドはマルチメディア式になっており、単に作品を音声解説するだけではなく、ミロにゆかりのある作曲家の演奏や、ミロと日本との関係を示す動画、ミロが実際に作品を制作している動画などもあり、非常に充実していた。音楽に関して印象に残っているのは、武満徹がミロのために作ったと言われる曲と、ドイツの現代音楽の作曲家シュトックハウゼンがミロのために作ったと言われる曲だった。

館内に所蔵されているミロの作品は、昨日訪れたダリ劇場美術館に所蔵されている作品に負けないぐらいの霊感を私にもたらしてくれた。具体的にどのような作品から影響を受けたのかは事細かく紹介しないが、とりわけ作曲上のヒントのようなものを与えてくれる作品がいくつもあったことを書き留めておく。

ミロの作品のみならず、オーディオガイドの動画の中で紹介されていたように、私はミロが実際の作品を描く前に残していたスケッチに関心を持った。中には、「これが私が実現させたい夢の色である」というメモが添えられた青いシンボルが小さくスケッチとして描かれていた。それをそのスケッチを描いてから数十年後に実際の作品として描くなど、ミロが残したスケッチは、時の発酵過程にさらされることによって、大きく育ち、実際の作品に結実していったのだと知り、大変感銘を受けた。その他にも幾つかのシンボルがどのようのプロセスを経て実際の絵画として具現化されるのかを垣間見て大きな刺激を受けた。

私は普段作曲をするときに、試したいことなどを作曲ノートにメモしているが、これをより発展させていけば、ミロのように、時の発酵過程にさらしながらそのアイデアを発展させていくことができるかもしれないと思った。

ミロの作品を十分堪能した後に、ギフトショップで、ピカソとダリと同じシリーズのミロに関する文献資料と、ミロ美術館のガイドブックを購入した。

今日はこれから、30分ほど仮眠を取り、オーガニックカフェのBONまで散歩し、夕食のサラダを購入したい。散歩から帰ってから、作曲実践をし、その後、今日購入したミロに関する二冊の文献を食い入るように読んでいきたいと思う。今回バルセロナに滞在することによって、様々な過去の偉大な芸術家と深く出会い、彼らが私に大きな影響を与えてくれたことに感謝をしたい。バルセロナ：2019/5/1（水）13:24

No.1909: A Life Theater of Lisbon

The city of Lisbon is the apotheosis of life theater. Lisbon, 04:24, Friday, 5/3/2019

4291.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ滞在の最後の夜に

時刻は午後の九時を迎えつつあるが、バルセロナの太陽はまだ沈まない。バルセロナの滞在も今日で最後であり、明日からはリスボンに五日間ほど滞在する。明日は、午前八時をめどにホテルを出発し、空港には早めに到着したい。バルセロナの国際空港からリスボンの国際空港へ向かう飛

行機の便は正午なのだが、空港のラウンジに早めに着き、二時間半ほどラウンジでゆっくりしようと思う。

バルセロナ・サンツ駅から空港までの移動時間には過去の日記の編集を主に行い、ラウンジでは作曲実践を主に行う。それと並行して作曲上の写経実践を行っていく。バルセロナからリスボンまでのフライトは二時間ほどあるが、機内では楽譜を広げるスペースがないため、フライト中は写経実践と日記の執筆や編集を行いたい。

幸いにも昨日の段階で、ウィルバーの監訳書の再校に対するレビューが終わった。念のため、先ほど自分が執筆した「はじめに」と「解説」の部分を再度読み返し、修正依頼事項を編集者の方に送った。これにて無事に、バルセロナ滞在中にレビューを終えることができた。三校からはもうほとんど修正はないことが予想され、こちらでレビューをする際にも、今回までのように一言一句見ていくのではなく、全体の体裁を確認することにとどまるだろう。とりあえず、再校のレビューが旅の前半に終わったことを嬉しく思う。

六泊七日のバルセロナの旅も終わりを迎えようとしているが、ここで得られた様々なことは、これからゆっくりと時間をかけながら咀嚼・吸収していきたい。それぐらいに、今回のバルセロナ滞在では得られるものが多かった。明日からのリスボン滞在においても同様の体験を積めることを願う。

今日は午後に仮眠を取った後に、オーガニックカフェのBONに足を運んだのだが、今日はLabor Dayということで店が閉まっていた。Google Map上においては今日も開いているような表示だったのだが、残念ながら閉まっていたため、その代わりにオーガニックスーパーに行って、十分な量のサラダを購入してきた。サラダを購入してみて気づいたが、わざわざレストランで夕食を摂るよりも、オーガニックスーパーでサラダを購入した方が様々な種類のものを手頃な値段で食べられることにふと気づいた。

明日からはリスボンに滞在し、リスボンの街にあるオーガニックレストランとオーガニックスーパーについてはすでに調べているが、リスボンの時間の流れが緩やかなためか、どのレストランも大抵ディナーに合わせて店が開くのが午後七時以降と遅いこともあり、明日からの夕食はオーガニックスーパーで購入しようと思う。その方が様々な食品を安上がりで食べることができるだろう。

© YOHEI KATO 2019

明日ホテルを出発する時間はそれほど早くないが、今日は少し眠くなってきているため、もうそろそろしたら今日は早めに就寝しようと思う。おそらく明日も三時半か四時に起床するだろう。出発の準備は明日の朝に行うことにする。バルセロナの滞在を思う存分満喫し、一切の悔いなくリスボンに向けて出発することができそうだ。バルセロナ:2019/5/1(水)20:58

4292.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ出発の朝に

バルセロナを出発する朝を迎えた。ここ最近と同様に、今朝も早起きをした。早朝の三時半前に起床した私は、まずシャワーを浴びて、一日の活動をゆっくりと始めることにした。シャワーを浴びながら、バルセロナで過ごした六日間の日々を回想し、そして今日から訪れるリスボンについて想いを馳せていた。

時刻は午前四時を迎えようとしており、この時間帯のバルセロナはとても静かだ。昨夜は幸いにも、昨日の日記で言及した、どこかの部屋からかすかに聞こえて来るロック系の音楽が深夜に聞こえることはなく、熟睡をすることができた。そのため、バルセロナを出発し、リスボンに向かっていく今の自分の心身の状態はすごぶる良い。今日のバルセロナの天気は晴れ、最高気温は17度、最低気温は13度と非常に過ごしやすい。一方リスボンは、天気は晴れなのだが、気温が非常に高い。最高気温は28度、最低気温は14度と夏日である。

リスボンの空港に到着するのは現地時間の13:15であり、その時間帯はまだ気温のピークではない。オランダもそうだが、ポルトガルも、日中の気温が最も高くなるのは16時から17時にかけてであるため、最も気温が上がる前にホテルに到着できそうである。ホテルに到着したら荷物を置いてゆっくりし、今日は上に羽織るジャケットはいらないであるから、長袖だけを着てリスボンの街を軽く散歩しようと思う。オーガニックスーパーに足を運ぶことを主として、周辺を散策したい。

これは私の推測であるが、バルセロナよりもリスボンの方が落ち着いた街であり、時間の流れも緩やかなように思う。世界の他の主要都市から比べれば、バルセロナも十分落ち着いており、時の流れも比較的緩やかだが、リスボンのそれはさらに自分に合致しているように思える。それを確かめる意味でも、今日リスボンの街に降り立った時の第一印象と、実際に街を散策してみた時の感覚がどのようなものかが楽しみだ。

リスボンには五泊ほど滞在する。今日から四日間は快晴のようであり、最高気温は軒並み25度を越す夏日和である。そのため、今日からの四日間は、ジャケットが不要となるだろう。幸いにも、最終滞在日の月曜日も晴れとのことであり、この日の最高気温は21度であるから、比較的過ごしやすいと言える。

リスボンを出発し、フローニンゲンに戻る日は曇りであり、この日のリスボンは涼しくなるようだが、肝心のフローニンゲンは晴れにもかかわらず肌寒い日となるようだ。このように、欧州諸国においては、街の外見上の表情が異なるのみならず、気候面にも置いても実に個性豊かな点が興味深い。

気候の多様性が街の多様性を育んでおり、その街の文化やそこで暮らす人々の心身及び精神や魂に大きな影響を与えているのが見て取れる。今日これから訪れるリスボンの街の個性と出会えることをとても楽しみにしている。この世界は個性豊かな無数の存在者で構成されているのだ。バルセロナ：2019/5/2（木）04:05

No.1910: A Road of Light in Lisbon

Lisbon has a myriad of roads constructed by light. Lisbon, 10:02, Friday, 5/3/2019

4293.【バルセロナ・リスボン旅行記】空腹によるケトーシス状態を活用していたミロ

時刻は午前四時を迎えた。今、新鮮な空気を自室に取り入れるために、バルコニーにつながる扉を開けた。

ここ最近は嬉しいことに、三時半あたりに起床することが習慣となり、それでいて非常に質の高い睡眠が取れている。こうした睡眠習慣のおかげで、日中に思う存分に自分の活動に励むことが可能になっている。

今日はこれからバルセロナを出発し、リスボンに向かうが、こうした旅の移動においても早起きをすることは良い影響を与えてくれる。ホテルを午前中に出発する時間的かつ心のゆとりが十分にある。昨夜少しばかり考えたところ、当初の予定よりも一本早い列車に乗り、バルセロナ空港へは九時あたりに到着しようと思う。そのためにはバルセロナ・サンツ駅を8:36に出発する列車に乗る。

当駅からバルセロナ国際空港までは三駅ほどなのでとても近いが、ホテルでゆっくりするのではなく、ホテルの椅子の座り心地などを考えると、搭乗時間まではラウンジでゆっくりと過ごした方がいいと判断した。ホテルの冷蔵庫に残っているのはリンゴ一つであり、水も切れてきているため、ホテルのラウンジで他の果物や水分を補給したいことも、早めにラウンジ入りをしたい理由である。

今回の旅においてもプライオリティー・パスは活躍してくれており、このカードのおかげで、世界中の空港の満足できるラウンジを無料で自由に利用できる。ラウンジの利用は、搭乗予定の飛行機の出発三時間前からであることを計算に入れて、九時過ぎに空港に到着するようにした。

リスボンに向けての飛行機は12:15発であり、搭乗開始は11:45あたりからであろう。バルセロナ国際空港に到着したら、速やかにセキュリティーに行き、それをすぐにくぐり抜けて、目当てのラウンジに行く。ラウンジでは、作曲実践を中心にして、その他には作曲理論書を片手に写経実践を行っていきたい。とにかく隙間時間においても学習や実践を着実に進めていく。

今回バルセロナを訪れたことによって、学習や実践に対する新たな姿勢や感覚を獲得することにつながったように思う。そうしたものを早速新たな習慣にしていくために、アクションを積み重ねていく。その継続の先に、自分の創造活動が開かれていくであろう。

昨夜、ミロの画集を読んでいると、大変興味深い記述に遭遇した。端的には、ミロも断食によるケトーシス状態の中で芸術活動に打ち込んでいたことである。厳密には、若かりし頃のミロは、単に貧しさからくる食料不足だったのだと思うが、ミロはシュルレアリスムへ傾倒している時に、当時頻繁に空腹状態にあったそうであり、空腹感がもたらす幻覚を活用して作品を描いていた、という興味深い記述があったのである。

この記述を読んだ時、私は先日行った七日間の断食の体験を思い出していた。ある意味、私は普段の日中の仮眠の際に、ビジョン的幻覚を見ているため、断食によって何か特別な幻覚が知覚されたかというとそうではないのだが、間違いなく仮眠中のビジョンの鮮明さが高まったことは強く印象に残っている。最初私は、断食によって無意識の中でもイマージュの生成を司る層が活性化されているのかと思い、確かにそれもそうだと思うのだが、単純に脳がブドウ糖ではなくケトン体によって

© YOHEI KATO 2019

動き始め、思考や感覚が鋭敏になるケトーシス状態がビジョンをより鮮明化させたのではないかと思っている。

日中に活動している時に目を閉じて静かにしていると、確かにミロが経験していたであろう幻覚のようなイメージが浮かび上がることはよくある。こうした幻覚症状は別に危険ではなく、実は私たちは多かれ少なかれ、通常の状態で日中活動している時にも絶えず幻覚的なものを知覚している。例えば、音楽を聴いている時に生成される微細なイメージや、もっと単純には、言葉を見聞きする時にも、一つ一つの言葉には呪術的作用（イメージや感覚の喚起力）があるため、私たちは四六時中幻覚体験をしているとも言える。

ミロの画集を読んでいて一番面白いと思った点はそこであり、空腹によるケトーシス状態を芸術活動に活かしていたミロには共感するものがある。今夜はリスボンのホテルで、まだ読んでいないミロ美術館のガイドブックをゆっくりと読みたいと思う。バルセロナ：2019/5/2（木）04:30

4294.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナを出発する朝に見た夢

時刻は午前四時半を迎えた。辺りはまだ薄暗く、小鳥の鳴き声は聞こえてこない。

今日はこれから作曲実践をして、その後出発に向けた準備を行いたい。出発に向けた準備と言っても非常に簡単なものであり、少ない荷物をスーツケースとリュックサックに詰めるだけである。

今朝方の夢についてまだ振り返っていなかったので、作曲実践に取り組む前に夢について振り返りをしておきたい。夢の中で私は、高校時代の二人の友人とヨーロッパの街を歩いていた。二人と初めて知り合ったのは高校一年の時であり、二人とは中学校は違ったが、高一の時のクラスが同じであった。二人ともテニス部に所属しており、私はテニス部に所属していたわけではなかったが、二人とは仲が良かった。

私たちが歩いていたのは、とても落ち着いたヨーロッパのある国の街だった。ほどよく経済が発展しているが、世界の主要都市のように無駄に発展しておらず、街の中心部も混雑していない。私たち三人はしばらく、街並みを堪能しながら散歩をしていた。すると私たちの目の前に赤い門が現れた。

特にこれといった特徴を持っていないその門の前で私たちはしゃがみ込み、話の続きをすることにした。

なぜか私たち全員は、大学院に所属しており、いつ頃卒業できるのかについて話をし始めた。一人の友人は、修士論文を執筆することに苦戦しているようであった。そんな彼から見ると、私はかなり悠長に勉強しているように見えたらしい。実際に私は、大学院での勉強のみならず、様々な活動や仕事を同時並行的に行なっていた。

そんな私に、「どうやったらそんなに多くのことを同時にこなせるんだ？」と彼は尋ねてきた。その問いかけに対して、どうしてか私は明確な答えを述べることをしなかった。そこから二人は大学院を卒業する期限について話をし始めた。なにやら、36歳までに大学院を卒業しなければ、学位が取得できないとのことであった。

二人の友人は、私にそうした年齢制限があることを知っているのかを尋ねてきた。それに対して私は、そうした年齢制限は一切心配する必要はないと述べた。というのも夢の中の私は、現実世界と同様に、すでに修士号を三つ取得しており、それ以上修士号という学位を取得することにさほど意味を見出していなかったからである。そうしたことが私にゆとりを持たせ、学業のみならず様々な活動に従事できていることにつながっているのかもしれないとふと思った。

そのような話をした後に、私たちは立ち上がり、門から離れることにした。同時に、そこで私たち三人はその場で別れることにし、各自が好きな場所を散策するようにした。私は特に行きたい場所もなかったので、引き続きその辺りをぶらぶらと散歩していた。すると、一軒の店が目に止まった。その店のガラス扉は、こちら側からは店内の様子が見えない作りになっていた。

どうやらそこは飲食店のようなのだが、その場で食べることはできず、ガラス扉に備え付けられたスピーカー越しに注文をし、外で食べ物を受け取るような仕組みになっているようだった。外からでも唯一わかるのは、店内で誰かが料理を作っていることである。そのシルエットが動いていた。私は一人のシルエットを見たとき、それが小中高時代の親友の一人（SI）だということに気づいた。私がガラス扉をノックすると、彼は私に気づいたようだったが、こちら側からはあちら側が見えない作りになっていたため、仮に親友が私に気づいたとしても、彼は私がまさか彼に気づいているとは思っても見

ないだろうと想像した。私に気づいた友人は、ガラス扉の機能を一瞬変化させ、彼は私に顔を見せてくれた。そこで夢の場面が変わった。バルセロナ：2019/5/2（木）04:49

4295.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ国際空港にて

たった今、無事にバルセロナ国際空港のターミナルに到着した。「無事に」という言葉を当てたのは、実は今から30分以上も前に空港に到着しており、セキュリティーゲートに向かっていったところ、列に並び、ボーディングパスのバーコードを機械に読み込ませてみると、それがうまく読み込まれず、違うターミナルにいることに気づき、今ようやく正しいターミナルに到着したからである。

実は私は、バルセロナに来るときにも、アムステルダムの国際空港で間違ったターミナルに入ろうとしており、バーコードの読み取り拒否をそのときにも受けた。なぜか私の頭の中には、全てのフライトは一つのターミナルから出発するものだという意識があるようであり、ボーディングパスに表記されているターミナルを確認することをいつも怠ってしまう。だが今回からは、もうそのようなことがないようにしたい。バルセロナの国際空港には合計で三つもターミナルがあり、バルセロナ・サンツ駅から列車に乗って空港駅に到着した時のターミナルはターミナル2であり、私はターミナル1に行く必要があった。

二つのターミナルは歩いて行ける距離かと思ったが、シャトルバスが出ているようなので、それに乗ってみたところ、歩いては決していけない距離だった。もちろん不可能ではないが、スーツケースを転がしながらバスで10分ほどの距離を歩くのはあまり現実的ではない。リスボンに到着してからも歩くことを考えると、早朝のこの時間に体力を無駄に消耗したくないという思いがあった。シャトルバスに揺られること10分すると、ターミナル1に到着した。

今朝は三時半に起床し、すでに二曲ほど曲を作り、さらにはガウディに関する文献資料を一冊読み終えた。それでも十分に時間が余っていたが、ホテルでゆっくりするよりも、空港のラウンジでくつろぎたいという考えがあったため、計画よりも一時間半ほど早くホテルをチェックアウトした。結果としてターミナル1にも早く着くことができたが、搭乗時間まで四時間ほどあるため、この時間にラウンジに行っても入れてもらえない可能性がある。通常、ラウンジの利用は、搭乗三時間前からということなので、今はまだ早い。

セキュリティーゲートをくぐり抜けていくことは今からでもできるが、その前に手持ちの水を全て飲まなければならず、ゲートを通過してから浄水器の水を飲むよりも、手持ちのミネラルウォーターをゆっくり飲みたいため、まだゲートに向かわず、今はチェックインカウンター近くの椅子に腰掛けてこの日記を書いている。この日記を書き終えたら、過去の日記を編集したいと思う。午前九時ぐらいまで編集作業を続け、そこからセキュリティーゲートを抜けていけば、ラウンジに入れるいい時間になるだろう。

ラウンジに到着したら席を確保し、果物類を食べようと思う。あるいは、野菜スープのようなものを最初に飲むかもしれない。そこからはエスプレッソでも入れて、それを飲みながら作曲実践と写経実践を行う。ラウンジでは三時間ほどゆっくりできそうであり、それだけ時間があれば充実した実践ができるだろう。リスボンに到着する前に日記の編集と十分な作曲実践ができることを嬉しく思う。バルセロナ国際空港:2019/5/2(木)08:21

4296.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ国際空港のラウンジにて

今、バルセロナ国際空港のラウンジでくつろいでいる。先ほど九時前に、チェックインカウンター近くの椅子に腰掛けながら過去の日記を編集していた。編集のキリがついたところでセキュリティーゲートに向かってみると、長蛇の列がそこにできており相当驚いた。列の数と長さはすごいものがあり、最初私は四時間以上早く空港に到着して正解だったと思った。ただし私は、セキュリティーゲートを速やかに通り抜けて、ラウンジで三時間近くくつろぎたいと思っていたため、それができそうにないほどの長蛇の列には少し辟易した。ところが実際に列に並んでみると、順調に列が進んでいき、列の見た目よりも圧倒的に早くセキュリティーゲートを抜けることができた。

ここ最近は、物理的なボーディングパスを持っているような人はよほどITに弱い古風な人なのだろうか、たいていの人はもう携帯上のボーディングパスのバーコードをかざす形でセキュリティーゲートまで向かっていた。私も携帯に保存しているボーディングパスを使ってゲートまで行った。ゲートに関しても、持ち込みのスーツケースで捕まっている人はほとんど皆無であり、肯定的な意味で検査が厳しくなく、皆速やかにゲートを抜けていった。ゲートを抜けたのが九時半過ぎであり、フライトの搭乗まで二時間以上ある形となり、ひとまずはホッとしている。

ゲートを抜けると、私は真っ先にラウンジに向かった。今利用しているラウンジは、Sala VIP Pau Casalsという名前のものであり、とても落ち着いており、これまで利用してきたラウンジの中でも指折りの綺麗さだ。

今朝は五時半あたりに、ホテルでリンゴを一つだけ食べ、ラウンジではそこに置かれている果物とサラダを食べようと思った。果物に関しては私が完全に見落としていたのだが、サラダに関してはラウンジに置かれておらず、時間が時間であっただけに、朝食メニューとしてパンやハムなどの料理が多かった。結局私は、おそらく酒のつまみとして提供されているピーナッツを多めに摂り、久しぶりにパンとクロワッサンを食べた――パンとクロワッサンに関しては「食べてしまった」と述べていいかもしれない。ラウンジでパンとクロワッサンを食べてしまったために、今日の夜は果物だけにしてもいいかもしれない。

あるいは、ここ数日間のように、二人前のサラダを食べるのではなく、一人前のサラダにとどめるぐらいにしていいかもしれない。搭乗までまだ時間があり、おそらくもう少ししたら、ラウンジのメニューが入れ替わり、昼食用のものになるだろう。その時に、スープとサラダがあればそれをいただき、夜は軽めにするかもしれない。

毎回旅行に出かけると、大小さまざまな学びがあり、私はよくありえないような失態をしでかすことがある。昨年の夏にスウェーデンとフィンランドに行った時は、フライトの時間を間違えてしまい、搭乗ゲートに到着した時は、搭乗予定の飛行機はすでに滑走路を動いていたという出来事があった。そこから私はとても基本的なことだが、搭乗時間と出発時間を混同しないようにすることを学んだ。また今日は、フライトのターミナルを確認することも学んだ。それらはどれも初歩的なことだが、こうしたことが抜けてしまいがちなのが自分だ。今から搭乗時間まで作曲実践と写経実践を存分に行いたい。まずはラウンジで一曲作る。バルセロナ国際空港のラウンジ：2019/5/2（木）10:33

4297.【バルセロナ・リスボン旅行記】バルセロナ上空で思うこと

たった今、飛行機がバルセロナ上空に飛び立ち、リスボンに向けて出発した。今日のバルセロナ上空は晴天であり、眼下に青く輝く海を眺めることができる。

今日は発着場が混雑していたようであり、結局予定よりも20分ほど遅く飛行機が空に飛び立った。今日はリスボンで観光する予定はなく、夕方はホテルを中心としてぶらぶらとリスボンの街を散歩する程度しか考えていなかったので、フライトの遅れは全く問題ではない。機内に乗り込んでから離陸まで時間があったので、アイマスクをかけてしばらく仮眠を取っていた。時間としては15分から20分程度だと思うが、その間にビジョンを少しばかり見た。

まさにアイマスクをかけて仮眠を取ろうとしている自分の周りの景色が脳内に流れ込んでくるかのように、燦然と輝く太陽が飛行場に降り注いでいる光景と、太陽の光を反射した飛行機が大空に羽ばたいていく瞬間のビジョンを見ていた。ビジョンが現れてくる前に、私はあるテーマに関する思念に囚われていた。それは昨日の早朝に取り憑かれたテーマとほぼ同じものであった。端的には、この現代社会、いや現代社会のみならず、人間の歴史とは、家畜が家畜を生み出す円環運動、ないしは人間の姿をした屑が屑が生み出す円環運動であるというテーマについて考えていた。

私たち人間は多様な知性を持っており、多様な個性を持っている。それは明白な事実なのだが、そうした人間の特性が、ある個人はその人の領域においては家畜から免れることはできるかもしれないが、他の領域においては家畜同然の存在になるという現象が起こっているように見える。

発達心理学しか知らない学者という家畜、外科手術しかできない医者という家畜、企業経営しかできない経営者という家畜、運動しかできないスポーツ選手という家畜、絵画しか描けない画家という家畜、栄養についてしか知らない栄養士という家畜などなど、この世界におけるある専門家はその専門領域においては専門家としての知識と知性を兼ね備えているが――知性を備えているかはまた少し話が違うが――、その領域をひとたび離れてしまえば、知識薄弱・知性脆弱の家畜同然の存在に成り果てる。

実際に、現代人はお互いを家畜同然の存在だと無意識的に思いながら接しているとしか思えないような場面にたびたび遭遇する。バルセロナ上空の機内から青く輝く海とバルセロナの街を眺めている自分もそうした家畜的人間の一人であり、機内に乗っている他の乗客も全員家畜のように思えてくる。この機内におけるこの瞬間においては、飛行機を操縦する機長がつかの間の間だけ、家畜を運搬する知識と知性を持った人間として存在している。どれだけ科学技術が発達しても、どれだ

け歴史が進んでも、人間は人間を超えていけないばかりか、家畜すらも超えていけないのだということがありありと実感される。

今回の旅を通じて得られた一つの大きなことは、家畜で溢れるこの世界の中で、一人の家畜として生き抜いていかなければならないという覚悟のようなものと危機意識であった。家畜として生き続けるためには皮肉なことに知識と知性がいる。それを獲得することを他者や社会に期待することはできず、自らの意思で獲得していく必要がある。これからリスボンに降り立つが、そこでもまた知識と知性の涵養に向けた歩みを進めていこうと思う。バルセロナ上空:2019/5/2(木)13:35

4298.【バルセロナ・リスボン旅行記】陽気さと幸福さの滲み出すリスボンに到着して

つい今しがた、リスボンのホテルに到着した。時刻はポルトガル時間の午後三時半を迎えた。

バルセロナとフローニンゲンの間には時差はないのだが、リスボンとバルセロナとの間には一時間ほど時差があり、リスボンの方が一時間早い。そのため、PC上の時間表示をポルトガル時間に設定し直した。携帯に関しては自動的に修正がされるので便利である。時差があることにによって何か問題があるわけではなく、PC上も携帯上も現地の時間になっているため、帰りの飛行機などに乗り遅れることなどもない。

リスボンの街に着いた印象、いやリスボンの国際空港に到着した瞬間に感じたのは、ゆったりとした時間が流れているように感じたバルセロナ以上にリスボンの時間の流れはゆっくりであるということだった。また、天気予報の通り、今日のリスボンは初夏の一日のようであり、その陽気さが相まって、心のゆとりがよりもたらされているように思う。

フローニンゲンでお世話になっている美容師のメルヴィンが述べていたように、私もバルセロナよりもリスボンの方が自分の心身の特性や状態に合っているように思う。これはとても贅沢な話であり、あれだけ芸術的な刺激をもたらしてくれたバルセロナよりもリスボンの方が良い印象を私に与えてくれている。仮にどちらかの街で住めと言われれば、私は間違いなくリスボンを選ぶだろう。リスボンの国際空港から市内へのアクセスは良く、列車も迷いようがなかった。空港から10駅ほど20分弱地下鉄に乗り、ホテルの最寄り駅Saldanhaに到着した。

物価に関しても、バルセロナよりもリスボンの方が安いと聞いており、確かに地下鉄も1.5ユーロと安かった。バルセロナで宿泊したホテルは四つ星ホテルであり、リスボンで今回宿泊するホテルも四つ星なのだが、そのクオリティーが随分と違う。

リスボンでこれから宿泊するホテルの質の方が随分といい。最寄り駅から近く、周りは比較的栄えているはずなのだが、室内の防音機能が大変素晴らしく、本当に静かである。また何より私を喜ばせたのは、部屋の内装の落ち着きであり、一番は大理石で作られた立派なデスクである。それを見たとき、このデスクであればより集中して作曲実践と諸々の学習に打ち込むことができると確信した。

確かに、ホテルを予約するときにいつも大切にしているのは浴槽の有無であり、同時にデスクの広さである。美術館や博物館で購入した文献資料や楽譜を広げられる十分なスペースのあるデスクが備わっているかどうかは、ホテル選びにおいて極めて重要であり、今日からの宿泊先ホテルは本当に申し分ない。

この部屋の作りは珍しく、浴室・トイレとベッドルームとの間にさらにもう一つドアがあり、外の音がベッドルームに入ってこないような細かな配慮までなされている。こうした細かな気配りを嬉しく思う。また、バルセロナのホテルでは冷蔵庫に水が備え付けられているだけだったが、このホテルでは水だけではなく、日本茶とハーブティーも備え付けられており、早速私は日本茶を入れていま一息ついている。

リスボンの気温は今の時間が一番暑く、今の気温はなんと28度である。これから30分程度仮眠をし、少し涼しくなってから、散歩がてらリスボンの街を少々歩き、オーガニックスーパーで果物とサラダを購入したい。今日はバルセロナの国際空港のラウンジで、朝昼兼用の食事をしてしまったため、今夜は小さめのサラダと果物だけを食べようと思う。

リスボンの街をまだ全く歩いていないのだが、最寄り駅からホテルの道を歩くだけでも幸福感が湧いてきて、この街をすでに愛し始めている自分がいる。今日からの五泊六日の滞在が本当に楽しみだ。とにかくこの街で心の底からくつろぎたいと思う。リスボン：2019/5/2（木）15:55

4299.【バルセロナ・リスボン旅行記】素敵な街リスボン

リスボン。それは素敵な街。

「素敵」という形容詞は稚拙でもなんでもなく、本当にそのようにこの街を形容したい。

確かにリスボンという街には、美しさやお洒落さがある。だが私は、リスボンを「美しい街」「お洒落な街」と形容することが躊躇われ、「素敵な街」と述べた。先ほどこの街を散歩しながら思ったのはそのようなことだった。街を歩きながら幸福感を感じたのは久しぶりだったかもしれない。

仮眠から目覚め、居ても立っても居られなくなったので、午後四時半あたりの一番暑い時間帯に散歩に出かけた私は、まずは目をつけていたオーガニックスーパーに行き、明日からの朝の果物と、旅行中はオーガニックココアを作って飲むことができないので、その代わりにカカオ100%か、それに準じる濃度のカカオペーストを半分ほど今回の旅行期間中毎日食べているため、それを求めにスーパーに向かった。

ホテルからは歩いて30分弱なのだが、途中の暑さにはまいった。オランダで過ごし始めて三年が経とうとしているが、こうした夏らしさを感じることはフローニンゲンではほとんどなく、とりわけ五月のこの時期にこのような暑さを感じることは全くない。繰り返しになるが、今のこの時期のフローニンゲンは冬用のジャケットないしはコートが必要であり、そして日によってはマフラーと手袋が必要である。そうした環境で三年間過ごしてきた私にとって、今日の暖かさは本当に久しぶりであった。喩えの関係が逆になってしまうが、これまでは水風呂に入っていたところから、サウナに入ったような感じであり、一気に身体の毛穴ならぬ「気穴」が開くかのような感覚になった。

欧州で暮らすようになってから、一つの土地には固有の土着神が宿っていることに気づき、私たち人間はある固有の環境で暮らすことによって、その土地でしか得られないものを授かることについてはたびたび触れてきたように思う。そうした恩恵は身体的な事柄かもしれないし、知的ないしは精神的な事柄かもしれない。いずれにせよ、まがいなりにもこの八年間欧米の様々な地域で生活をし、様々な場所に旅行に出かけてみて言えることはそのようなことだ。

そうしたことを考えてみたときに、私は水風呂からの休憩としてサウナに入るためであれば、リスボンのような場所で一時的に生活をするのは良いことなのかもしれないと思った。ただし、私の特質やライフワークの種類と性質を考えてみたときには、私は寒い地域に住むべきなのだと思う。私は元来能天気なほどの陽気さを持っており、そうした人間は決して同質な陽気さを持つ街で暮らしてはならない。仮に私が陽気な場所で暮らし始めたら、本物の能天気になる。

自分の特質とは真逆の極性を持つ寒い地域で生活を営んでいくことが、私にとっては望ましいということを改めて実感しながらリスボンの街を歩いていた。とはいえ、こうした素敵な街で暮らしてみたいという思いは依然としてある。

リスボンの街の表情は、一見するとサンフランシスコに似ているかもしれない。サンフランシスコと同様に、あちこちに坂道があることが面白く、また家々の表情も豊かだ。印象としては、サンフランシスコよりも清潔感があり、建物の表情もより歴史を感じさせるヨーロッパ的な色合いが強い。その他に私が注目をしていたのは、リスボンの街の石畳の道である。これはホテルの最寄りの地下鉄から地上に出た瞬間に気づいた。石畳の道として私がすぐに思いつくのは、パリやコペンハーゲンの石畳の道であり、両都市の石畳の道の硬質さには本当に驚かされたのを今でも覚えている。

私が両都市で生活を営むことが決してできないと思ったのは、こうした硬質な石畳を歩くことによって、精神が圧殺されると思ったからである。精神の弱い私にとって、パリやコペンハーゲンのような硬質な石畳の道を歩くのは危険であり、精神を崩壊させかねない可能性があると強く思ったのを覚えている。一方、リスボンの石畳の道は陽気さがある。そうなのだ。ここの石畳の表情は陽気なのだ。それに気づいた時、とても愉快な気持ちになった。

日向の道はかなり暑く、額と背中から汗がにじみ出てくるほどだったが、ひとたび木陰の道を歩くと、とても涼しい風が道を通り抜けていき、体感温度が一気に下がり、スーパーまで快適に辿り着くことができた。目当ての品を全て購入し終え、最後にサラダを購入してホテルに戻ろうと思ったが、サラダが置かれていなかった。そこで私は、そのスーパーの隣の隣あたりにあるサラダビュッフェの店の料理が非常に美味しそうに思えたため、夕食はそこで食べることにした。この店に入って正解だったのは、スープや野菜を食べ放題なだけではなく、その価格も非常にリーズナブルだったことだ。リスボンはバルセロナよりも物価が安いと聞いていたが、本当にそうだと実感した。

この街の陽気さ、食べ物の値段と味を含め、初日から私はリスボンの街の虜になったようだ。とはいえ、この街で年中暮らそうとは思っておらず、上述の通り、年に数ヶ月間ほど滞在することができたら理想である。

自分の特性、およびライフワークについて考えてみたときに、私が落ち着く拠点として考えているのは、ノルウェーのベルゲン、フィンランドのアイノラなどであり、それらよりも冬の厳しさを和らげ、それでいて自然が身近にあって落ち着きを感じさせてくれる街としてフローニンゲンやデン・ハーグを候補として挙げたい。それらの場所に加えて、リスボンが短期滞在の候補地に挙がったことを嬉しく思う。リスボン：2019/5/2（木）19:34

4300.【バルセロナ・リスボン旅行記】リスボン滞在初日の夜に思う今後の旅行の仕方について

時刻は午後の九時半を迎え、リスボン滞在の初日がゆっくりと終わりに近づいている。つい今しがたゆったりとした入浴を終えた。この日記を書き留め、少し休憩したら就寝し、明日からの本格的な観光に備えたい。

先ほど、リスボンの街を歩いた際に受け取ったこの街に対する第一印象をもとにした曲を作った。自分がこの世界のある瞬間のある場所において感じた固有の感覚を曲という形にしていくこと。いかなる質であれ、それは紛れもなく自分のライフワークの一部となる。今の自分の成熟度、そして人生におけるある時点において表現できうる限りのことを曲という形で表現していく。

今日からリスボン入りをしたということもあり、早速ポルトガルの作曲家が作ったピアノ曲集を聴き始めた。今もホテルの自室にその曲集を流している。この曲集に収められている一つ一つの曲は、まさにポルトガルという国でなければ生まれ得なかった固有の感覚質を内包している。それが何かを少しずつ掴んでいくためにも、明日からの、いや今日からの滞在の一瞬一瞬の体験が貴重なものになっていく。

リスボンの街を夕方に歩いていると、今日のフライトのことが思い出された。飛行機という乗り物は、確かに人間の技術の産物であるが、それは人間の身体性を大きく超えてしまっているものであるがゆえに、この乗り物に長時間乗ることはあまり身体に良い影響を与えないのではないか、というのはいつも思うことである。

実は昨日ミロの画集を眺めている時に、ミロも晩年においてはできるだけ飛行機での長距離の旅を控えるようにしていたらしい。それはまさに、飛行機に長時間乗るということがもたらす悪影響をミロが理解していたからだろう。飛行機が人間の身体性の限界を遥かに凌駕した乗り物であるならば、仮に宇宙に旅行に行けるようになったとしても、それはある意味寿命を縮める覚悟を持っておいた方がいいかもしれない。

飛行機がリスボン近くの海の上を通り、眼下にリスボンの街が見え始めた時、宇宙旅行に行くことの是非についてふと考えていた。そうなってくると、オランダ人の人たちが行っているように、小型の船を購入し、沿岸沿いに移動しながら世界を旅するというのも悪くないと思った。また、いつか車を購入し、欧州の陸路を車で転々と移動しながら旅行していくのも悪くないと考えた。とにかく飛行機のように、いやそもそもあれだけ知らない人たちが無数に集まる空港に行くのが最近あまり気乗りしなくなってきており、飛行機に乗ることが自分の身体性を微妙に狂わしていることにも気づき始めているため、中年期以降はもうできるだけ飛行機には乗らないような形で旅行が実現できればと思う。

そうなってくると、日本に足を運ぶことが遠のいてしまうが、ロシアまで陸路で行くことができれば、そこから船で北海道に入ることなども経路としてはありだろう。今後は、自分が持ち合わせている必要かつ大切な感覚と厭人性を保持・育成しながら、人が集まる空港を避け、身体機能を微妙に狂わす飛行機に乗ることを避け、他の交通手段を用いて今後の旅行を実現させていく準備を進めていこうと思う。そして、吟遊詩人のように、世界中を逍遥しながら日記を執筆し、作曲をし、どこにいてもライフワークを地道に続けていく。リスボン滞在初日の夜はそのようなことを思わせてくれる。リスボン:2019/5/2(木)21:55